

vivo

水戸芸術館音楽紙 [ヴィーヴォ]

6 JUNE 2006

CONTENTS

- 水戸室内管弦楽団
第65回定期演奏会1,2
最近の公演から&ネタマ3
インフォメーション4



写真上段:水戸室内管弦楽団
中段・左から;工藤重典、宮本文昭、ヴェンツェル・フックス
下段・左からダーク・イェンセン、ラデク・バボラーク、吉野直子

世界を一望するモーツァルトの音楽

6 / 8(木) 9(金) 10(土)水戸室内管弦楽団第65回定期演奏会

指揮者を置かずに、演奏者たちそれぞれが積極的に自らの音楽表現を提示し、彫琢され、あたたかも室内楽のように繊細な音の織地を紡ぎ上げていく……。オーケストラの先進的なこの形態は、水戸室内管弦楽団(MCO)のメンバーが室内楽や独奏者としても活躍する演奏家たちだからこそ可能なのです。

第65回定期演奏会は、MCOの活動の大きな柱のひとつであるこの指揮者なしの演奏会です。プログラムは、MCOの最重要レパートリーともいえるモーツァルト作品から、管楽器のための協奏曲を中心に構成しています。具体的には、オーボエ協奏曲 八長調 K.314(285d)、フルートとハーブのための協奏曲 八長調 K.299(297c)、クラリネット協奏曲 一長調 K.622、フルート、オーボエ、ファゴット、ホルンのための協奏交響曲 変ホ長調 K.Anh.9(297B) というラインナップです。さらに冒頭には歌劇 フィガロの結婚 K.492 の序曲が配され、華やかな演奏会の幕開けを飾ります。

協奏曲の演奏と言えば、誰がソロを務めるのか

が大きな関心事ですが、MCOには花形管楽器プレーヤーが目白押し!パリ・エコール・ノルマル音楽院で教鞭を執る一方、国際的に活躍する工藤重典(フルート)。惜しまれつつも間もなくオーボエ奏者としての活動のフィナーレを迎える宮本文昭(オーボエ)。小澤征爾音楽顧問も最高の奏者と絶賛するダーク・イェンセン(ファゴット)。そして「革命児」「神業」「百年に1人の逸材」等究極の賛辞が贈られ、ベルリン・フィル首席奏者としても活躍するラデク・バボラーク(ホルン)。さらにゲストとして、バボラークを通じてMCOの活動を知り共演を熱望してきたベルリン・フィルの首席奏者ヴェンツェル・フックス(クラリネット)と、MCOとこれまで数多く共演し、もはやMCOメンバーの一員と言えるほど互いの気心が通じている吉野直子(ハーブ)が登場します。

記念年にみるモーツァルト受容の変遷

今年はモーツァルト生誕250年ということで、ヨーロッパばかりではなく日本でも数多くの演奏会が催され賑わいをみせています。1991年の没後

200年の際も演奏会、記念出版、CDなどたいへんな盛り上がりようでしたが、もしかしたら今年はそのときを凌ぐほどの衆目を集めているのではないのでしょうか。少なくとも日本では、連日のテレビなどマスコミでの取り上げられようや演奏会の数などを考えると、クラシック音楽の愛好者でなくても、今年はモーツァルトの記念年であることを誰もが知っていると思われるほどの熱狂ぶりです。

これと比較して1891年のモーツァルト没後100年の際はどうかであったのかと言うと、モーツァルトの全ての作品の楽譜を体系的に網羅しようとする『旧モーツァルト全集』の編集、刊行(1877~83)がなされたばかりの時期で、ウィーンやザルツブルクでも、演奏会で取り上げられる作品は非常に限られたものであったようです。19世紀においては、すでにモーツァルトは重要な作曲家であったことは間違いないのですが、モーツァルト作品の全体像を照射するための学問的な研究や演奏の実践は、まだその端緒について間もない状況でした。むしろ、近代的な自我の下、世界の真理を獲得しようとする当時の西欧的な知性にとって、重要で

あったのはベートーヴェンでした。

したがって、今日のモーツァルト礼賛の声には、ある種の価値の転換をみる思いがします。

現代に息づくモーツァルト

それでは、現代の私たちは、モーツァルトの音楽のどのようなところに共感し、また魅力を感じているのでしょうか？ その秘密を解く糸口として、美学・芸術学研究者の國安 洋氏の論考をご紹介しますと思います。本論文のタイトルは「東洋のモーツァルト」(没後200年記念出版『モーツァルト』第2巻に所収、岩波書店、1991年刊。)というもので、まず、最初にモーツァルトの音楽とはどのような特色をもっているのかについて考察し、さらに日本でモーツァルトがこれほどまでに受け入れられている理由について探究しています。以下、非常に大まかになってしまうのですが、同論文の要点をまとめてみます。

創造の源泉や刺激を、生活のそれぞれの局面で経験したことから得る作曲家は少なくない。そして彼らはそれを表現の対象にする。つまり、それを直接に描写したり、一旦印象として内面化してからそれを音に託したりすることもある。標題音楽(ベートーヴェンの「田園」交響曲のように表題がつけられた音楽)や詩的音楽はこうした表現に言葉での説明を与えたものである。しかし、これはモーツァルトには無縁のことであった。一般に標題音楽に対するものは絶対音楽とされているが、これは19世紀的な観念であって、ベートーヴェンには言い得ても、モーツァルトには妥当しないであろう。モーツァルトの音楽は絶対音楽というよりも純粹音楽、アインシュタインの言葉を借りれば「濾過された音楽」である。モーツァルトの濾過された音楽は、創造の出発点において刺激は音楽そのものからしか受けない。また、それを表現対象にすることもない。音楽は音楽でなければならない。

一般に音楽形成の基本的類型として「展開的」タイプと「並列的」タイプが挙げられる。前者はソナタ形式の主題とその展開、あるいは主題劣作に典型的に実現されているものである。西洋近代の音楽形成の根本は「有機的生成の原理」に基づくものであるが、展開的生成はその原理に即応するものであった。ウィーン古典派の弦楽四重奏と交響曲が「自律的音楽」として成立し、またそのことによってウィーン古典派様式が確立し得たの

も、この有機的生成の原理に基づいてはじめて可能なことであった。そして音楽形成においてこの原理に忠実に立脚しているのがハイドンであり、それを徹底的に追求して理想的に実現したのがベートーヴェンであった。

モーツァルトはウィーン時代にはいつからハイドンの「ロシア四重奏曲」を通してこの展開的生成法を知る。そしてそれに挑戦し、努力をしてモーツァルト独自の仕方でものにする。……しかしそれを達成した後は、すぐに逸脱し、自己に固有の原理に戻っていくのである。モーツァルトはハイドンとベートーヴェンと並んでウィーン古典派の一人とみなされているが、音楽形成法に関してはモーツァルトは他の二人とは対照的である。

モーツァルトの音楽形成の特色は、ありあまる楽想から出発してそれを多彩に連続させ、組み合わせさせていく、その多様性にあると言われている。思いつきから思いつきが生ずる。従ってその進行はつねに主題から外れる。しかし、そこにはまた主題へ帰って行く柔らかな力が存在する。……音楽の脈絡はしばしばただ一つの動機の芽から成長するのである。

「展開的」ならびに「並列的」のいずれにも拠らないモーツァルト固有の音楽形成法は「変奏」であるように思われる。モーツァルトの変奏では自己充足した主題の「自己変容」に重点が置かれている。そしてこの変奏に基づく音楽においては「書かれた」契機よりも「今ここに演じられる」契機としての即興性が重要な役割を果たしているのだが、即興が生きている変奏は音楽の「自然」であろう。

モーツァルトの自然は、「おのずからなる」と捉える日本の自然の考えかたと照応するのではなからうか。すでにみたように近代の「自律的音楽」とは異なって「有機的生成の原理」に基づかないモーツァルトの音楽は楽想から自然に成長していく。それは「おのずから出て来る思いつき、あるいは楽想からの自然な生長」である。

「おのずからなる」自然は人為と対置されるものではない。人為を越えることによって、これを包み込むものである。すべてを包摂する自然である。この点でもモーツァルトの自然は日本の自然概念に照応する。その人為を越えた人為は、いわばもう一つの自然であろう。それをアインシュタインは「第二の素朴」と呼んでいる。

モーツァルトの音楽は矛盾に充ちている。とい

うより人間の存在と自然の在り方をそのまま映し出して、それらの矛盾としての存在を自己のうちに両立させているのである。モーツァルトの音楽は謎に満ちていると語ったが、この謎は「矛盾の両立」と関わっているように思われる。

以上が國安氏の論文の要旨です。ベートーヴェンは西洋音楽の王道を行く「自律的音楽」であり、いわば「人為」の徹底的な探究の先に何らかの「真理」や「答え」を見出そうとしたのに対し、モーツァルトは「人為を越えた人為」とも言える「第二の素朴」の境地にあり、それは私たちの存在やその所業をも包み込む大いなる自然(=「もう一つの自然」という地平で鳴り響いていると言えそうです。言い換えるならば、モーツァルトの音楽は、人間の有り様とそれをとりまく世界を、そこに足を下ろしている自身の目線からではなく、何処か天空のような遥かな地平から、その全てを一瞥しているようなものなのではないでしょうか。そして、この視点の変化こそ、現代の知性がいかにモダニズムというものから転換しつつあるのかを伝えてくれるものなのです。

ひとときわ輝くモーツァルトの協奏曲

さて、冒頭でお伝えしましたとおり、今回の演奏会では、モーツァルトの協奏曲をたっぷりとお楽しみいただきます。交響曲や弦楽四重奏曲に比べると音楽的な深遠さという点では、協奏曲は少し劣るのではとお考えの方もいらっしゃるかもしれませんが、先の國安氏の論文からもお分かりの通り、モーツァルト作品においては、モーツァルト固有の音楽としてその真価が発揮されているのは、むしろ協奏曲の方であると言えそうです。しかも、そのモーツァルトの協奏曲は単なる名人芸の陳列などではなく、独奏楽器とそれを引き立てるオーケストラとの親密な連関が生み出す、どこまでも昇華された音楽です。こうした作品であるが故に、独奏者が普段はオーケストラのメンバーでもあつて、互いを知り尽くしている名手たちの集まる水戸室内管弦楽団による演奏ほど、ふさわしいものはないと言えるのです。モーツァルト作品でもひとときわ輝いている楽曲を、水戸室内管弦楽団の演奏でお楽しみください!

なお、6月8日(木)には、NHK県域デジタル放送によるTV中継と千波公園ふれあい広場での大スクリーン・コンサート(入場無料)を予定しています。(雨天順延)[お問い合わせ: 水戸芸術館 TEL:029-227-8111] 《中村》

最近の公演から

APRIL



1



2



3



4



5

1～2.「茨城の名手・名歌手たち 第17回」
出演者オーディション

3～5. ATMアンサンブル第21回演奏会

「茨城の名手・名歌手たち 第17回」

出演者オーディション(4月15日)

9月30日[土]に開催する「茨城の名手・名歌手たち 第17回」演奏会に先立ち、4月15日[土]に出演者オーディションが行われました。今回の対象は、鍵盤楽器、弦楽器、邦楽器、邦楽アンサンブルの各部門。満足のいく演奏ができた方も、そうでない方も、一所懸命さは一様に伝わってきました。厳正な審査の結果、以下の7名と1組が見事合格し、9月の演奏会に出演します。《馬場》

「茨城の名手・名歌手たち 第17回」

2006年9月30日[土] 18:00開演

【司会】畑中良輔

【出演(受験番号順)】

長澤 順(パイプオルガン)

小川 瞳、清水美和、小野智恵、藤田まどか

(以上、ピアノ)

牛草葉那(ヴァイオリン)、宮田悠貴(ハーブ)

初見宗郷・佳秋(尺八・箏アンサンブル)

応募総数 29

(鍵盤楽器20 / 弦楽器5 / 邦楽器3 / 邦楽アンサンブル1)

審査委員(敬称略・五十音順)

【審査委員長】畑中良輔

【鍵盤楽器】

岩井宏之、小林 仁、高山三智子、畑中良輔、
間宮芳生、若杉 弘

【弦楽器】

岩井宏之、畑中良輔、堀 伝、間宮芳生、
若杉 弘

【邦楽器・邦楽アンサンブル】

岩井宏之、田村拓男、畑中良輔、間宮芳生、
若杉 弘

ATMアンサンブル第21回演奏会(4月29日)

第13回碧南演奏会(4月30日)

全4曲からなるオール・モーツァルト・プログラム。最大の話題はクラリネットに、元ベルリン・フィルの首席奏者であり、世界最高の名をほしいままにしてきた名手、カール・ライスターを迎えたこと。ライスターは事前に3日間のリハーサルを要求、この初共演に賭ける気合を感じさせた。ライスターの考えをたちまち掌握し、音にして返す名手たちに、ライスターも上機嫌。リハーサル

は日に日に短時間となり、巨匠は「本番は実際の演奏時間より短くてすむよ!」とジョークを飛ばす。弦楽四重奏の2曲も、活気あるリハーサルがつづく。完売御礼となった演奏会は熱気に包まれ、まるでやかなライスターの音色と弦が融けあう至上のときとなった。アンコールにはクラリネット五重奏曲 イ長調 K.581の第3楽章を再演。「ミナサンノタメニ モーツァルトノ メヌエットヲ モウイチド エンソウシマス!」というライスターの朗々たるスピーチに、聴衆から大喝采。終演後のサイン会も長蛇の列。モーツァルトの生誕250年を記念して250円の飲み物は無料、というサービス(協力は株式会社エディファミリー)も好評。

翌日は碧南公演。こちらもちケット完売御礼。ライスターとATMアンサンブルは前日の演奏会や移動の疲れをものともせず、いっそうのびのびした演奏を繰り広げた。終演後は同ホール友の会の皆様との交流会もあり、盛り上がった。

なおライスターはこれに先立つ23日(日)、水戸市芸術祭の「交響楽演奏会」において、茨城交響楽団と指揮およびクラリネット独奏で共演した(こちらモーツァルト・プログラム)。やはり事前に3日間のリハーサルを行ったライスター、妥協なき厳しさにユーモアをまじえながら、同楽団との音楽作りに真摯に取り組んだ。芸術館を介して実現したこの共演、ライスターと楽団の間に暖かい交流が生まれる実りあるものとなった。《矢澤》アンケートから(第21回演奏会) 95年に続き(注:水戸室内管弦楽団第24回定期演奏会への出演)、2度までもライスターの演奏を生で聴けるとは…。水戸に住んでいてよかった…。(水戸市:K.S.さん) 弦の音もいい音ですが、ライスターさんのクラリネットには酔わされました(小美玉市:M.Y.さん) 弦楽のためのアダージョとフーガは初めて聴く曲だけど、心に深く残る一曲でした(東海村:S.M.さん) 10代の頃からのカール・ライスターのファンです。水戸で聴けるとは思っていなかったので、夢のようです(水戸市:A.U.さん) ホールの雰囲気素晴らしく、モーツァルト・プログラムということもあり、幸せな気分になりました。(中略)2曲目(注:弦楽四重奏曲二短調) プラボー!(武蔵野市:無記名の方) 天上の音楽でした。涙がとまりません(西東京市:K&Y.H.さん)



今回はMCOクイズだ!

このところ毎月かなり踏み込んだ内容になっていたの、気分転換に水戸室内管弦楽団第65回定期演奏会に関するクイズでもやることにしよう。MCOファンのみなさん、演奏会前のお楽しみに、いかがでしょうか?

1 水戸室内管弦楽団第65回定期演奏会で演奏される4曲の協奏曲は、すべて水戸室内管弦楽団が

過去に演奏したことがある。その中で1曲のみ、過去に演奏されたときとソリストが違っている曲があるが、その曲はなにか、その曲が第何回の定期演奏会で演奏されたか、そのときのソリストは誰だったか。

2 今回の演奏曲目には、歌劇 フィガロの結婚 序曲が含まれているが、次に挙げるモーツァルトの歌劇の序曲でMCOが演奏したことのないものはどれか。A 後宮からの逃走 B イドメネオ C 魔笛
3. 協奏交響曲 変ホ長調 K. Anh. 9(297B) の復元版を作ったロバート・レヴィンは、音楽学者

であると同時に、演奏家としてもCD録音を行うなど活躍している。さて、彼は主に何の楽器の奏者か。

いかがでしょうか。こんなの簡単!という方は、音楽部門まで解答をお寄せください(Eメール/アドレス:nettama@arttowermito.or.jp) もしくは郵送でどうぞ。正解は次号で!コメントつけてくれた方はご紹介させていただくかもしれません。匿名もしくはペンネームご希望の方はその旨明記してください。

